# 発達障害のある高校生の大学進学について
# ～スムーズな移行を目指して～

富山大学保健管理センター・准教授
富山大学学生支援センター・トータルコミュニケーション支援室
西村　優紀美

Aiming for a smooth transition from high school to university for students with developmental disorders

## 1．大学進学に関する課題

進学を希望する発達障害のある高校生にとって、大学進学は新しい環境への適応や新たな課題への対処など、新しい生活スタイルの構築を求められる体験であり、これまでの生活スタイルの大きな変革を必要とされる。環境の変化に敏感で、未来のことを想像することが苦手な発達障害生徒にとって、受験期を乗り切ること自体が大きなストレスになる場合がある。このような変化の多い時期を、学校と保護者が協力し合い、学習面、メンタル面で支えていく特別支援教育の役割は非常に大きい。

大学は義務教育や高等学校での教育とは質的に異なる学びの場がある。大きな違いは、すべてを自らの判断で選び、実行していくという環境である。入学直後、授業のシラバスを見ながら時間割をつくり、翌日から授業を受けなければならない。授業形態は授業者によってさまざまであり、授業によっては担当教員が複数の場合もある。評価はテストやレポート、出席状況など教員によって異なるので、その対策は科目ごとに行わなければならない。このように高等学校までの構造化された環境が一変し、自らの判断で自己選択しつつ、その時々の状況によって取捨選択していかねばならない環境は、発達障害のある学生にとって大きなストレスとなりやすい。

一方で、大学は興味関心のある専門的な学問を学び、より高度な知識を習得し、能力を発揮できる場である。数学や物理学、歴史学、哲学などのゼミ形式の授業で、詳細なレポートを作成し、教員や学生とディスカッションを展開する自閉症スペクトラム障害の学生がいる。また、サークル活動で趣味を活かし、同じ嗜好性を持った学生同士、活発な交流を実現している学生もいる。発達障害の特性は依然として持ちながらも、充実した大学生活の中で、二次的症状が消失していく学生も多い。高橋[1]は、大学進学について、「社会に出る前に、大学というある程度失敗が許される環境のなかで、スキルを伸ばす機会を持つことには意味があるだろう」と述べている。筆者[2]も、「大学生活は専門的な学問を学ぶだけでなく、どのような社会人になるのかという将来像を描くこと、そして、自分自身の弱みと強みを引き受けて生きていく事への自覚を持つこと等、青年期のアイデンティティに関わる大きな節目に対峙している時期」として捉えており、支援者として青年期にあたる大学生の心の成長をサポートすることを大きな目標に置いている。大学生活を通して青年期の人間的な成長を促進するための環境を整え、学生自らが自己理解を果たす機会を保障することは高等教育の大きな任務である。

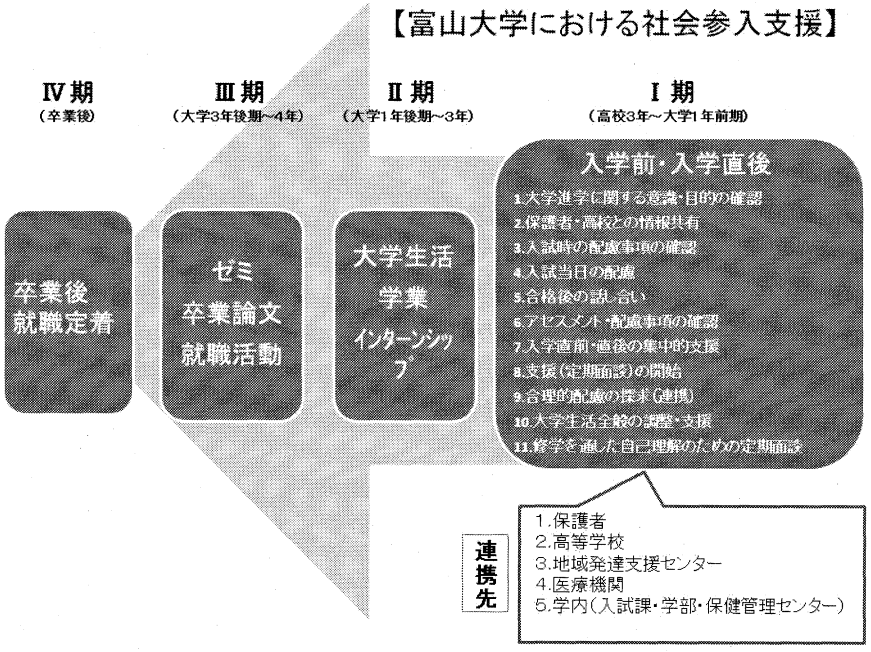
## 2．社会参入支援としての移行支援

富山大学では、高大移行支援を段階的な社会参入支援の第Ⅰ期として位置づけ、高校生段階で支

援に繋がった生徒に対して、移行支援を開始している（図１）。

社会参入支援とは、「学生が新しい環境（社会）へ参入するプロセスを一貫して支援すること」と定義づけており、学生と支援者が対話の中からある物語を産出し、学生自らが新たな環境の中に歩み入り、自ら歩み出すという、学生の成長モデルを基盤に置いた支援の在り方を描写するものである[3]。つまり、高等学校から大学へ時期を、単なる「移行＝ある状態から他の状態に移っていくこと」として捉えるのではなく、「社会参入＝社会的関係の中で自立した主体として参加し、その中で自己実現を図っていくこと」として位置づけている。このような移行支援の目標を達成するためには、高等学校の進路指導担当者、あるいは大学の支援者が単独で移行期を支えるのではなく、それぞれの支援担当者が一堂に会して一人ひとりのケースを検討する中から、支援方針を決め、協働的に支援を行っていくというモデルを展開していく必要がある。

富山大学では、平成19年度より、発達障害大学生支援を開始し、その拠点を「トータルコミュニケーション支援室」に置き、包括的な支援を展開している。また、平成22年度より高校教職員との懇談会やオープンキャンパスでの相談ブースを開設し、積極的に入学前の修学相談に対応している[4]。今年度、高校３年生時より進学相談を受けていたアスペルガー症候群の診断のある生徒で、本学に入学した学生に対して入学直後の集中的な支援を行った。前述した変化の多い時期に学ぶ環境を整え、学生の不安を解消できたことの意義は大きい。支援の中で明らかになった当該学生の問題は、①無理な履修計画を立てがちである、②急な予定の変更に対処できない、③授業の資料やプリント類の管理ができない、④スケジュール管理ができず課題が累積する、⑤休息（リフレッシュ、緊張をとる）時間の確保ができず疲れがたまる、等であった。定期的な面接を継続し、入学直後の混乱が大きな問題となることはなく、無事単位を取得することができた。支援を受けた学生は、



「自分のありがちな行動を毎週チェックしてもらえたお陰で、自分の特性に対する向き合い方を知ることができた。後期は、プリント整理と授業中のノートのとり方について話し合いたい。」と言っている。支援を受ける中で、自身の障害特性への対処法を学ぼうとする意欲を見せている。

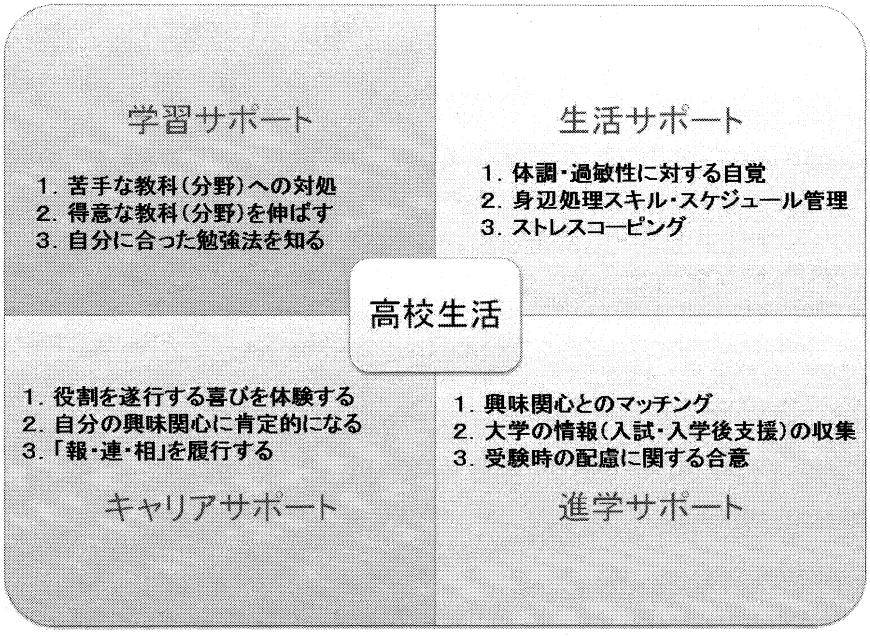
### 3．高等学校に必要な4つのサポート

(1) 学習サポート

発達障害のある生徒は、それぞれ固有の認知特性を持っている。一般的にADHDの生徒は「注意の持続・分配・転換」が困難とされ、学習障害や自閉症スペクトラム障害の生徒は、「見ること・書くこと・読むこと」の困難さ、あるいは偏りがあると言われている。このような認知特性に対応した適切な指導は必要不可欠であり、彼らが障害による不利益を被らないような配慮をする必要がある。大切なことは、生徒自身が自分にとって学びやすい学習方法を知ることである。自分にとってより学びやすい勉強方法を教師と生徒が一緒に見つけ出していくことが大切である。また、特異な分野の学問に対する興味を失わせることなく自信を持たせると同時に、苦手な教科をどのように学んでいくか、対処法を一緒に検討することも重要である。時には、苦手な教科を避けて受験に臨むこともあるだろうが、語学や一般教養科目は入学後も履修する必要がある。単に避けるだけでなく、どう対処するか検討する姿勢を育てて欲しい。たとえば英語の場合、「英会話は苦手だけど、英文法なら大丈夫」ということが認識できているだけで、いくつかある英語の授業の中で自分に合った授業を選択することができるのである。このように、学習サポートとは、教科の学習だけでなく、学び方や苦手さへの対処法なども含む支援を指している。

(2) 生活サポート

大学で修学に関わる問題として重要なことは、体調管理と過敏性に対する自己管理である。先にも述べたように、大学生活は変化に富んだ環境であると共に、保護者の管理から自己管理への移行を余儀なくされる時期でもある。特に、一人暮らしをする場合、生活面の自立は、修学に大きく関



わる重要な事柄である。すべてを完璧にこなそうとした大学生が、1年生前期で力尽き、授業に出られなくなったというケースも聞いている。大学生活を安定的に送ることができるような生活面のサポートは、保護者と協働で行う必要がある。緊張が続いた後のリラックスの仕方、大学受験までのスケジュールの立案、自己管理スキルの習得など、自分自身の身体の感覚と精神状態をモニターする方法を見つけ出すことが重要である。

(3) キャリアサポート

発達障害のある学生は、自分の趣味や強みに関してマイナスのイメージを持っていることが多い。同年齢の仲間と趣味が違うことで、自分の嗜好性を否定的に捉えている可能性もある。周囲の大人から、「そういうことばかりやっていないで、みんなと同じことに興味を持ちなさい」と言われ、自信をなくしている場合もある。しかし、大学生活の中で自分をリラックスできる一番の妙薬は、趣味の世界である。また、その趣味の世界を通じて仲間づくりをすることができる。そして就職活動の際には、そのことを通して「自己ピーアール」することも可能である。彼らが指向することがらの中に、彼らの強みを見いだすことができるからである。同様に、キャリア教育につながることとして、「役割を遂行すること」と、「役割を遂行することによって誰かの役に立っているという喜びを知る」という感覚は、社会人としての責任を自覚する上で重要な意識である。高校生活の中で係活動や仕事を通して、他者と協力し合って物事を遂行することを体験する必要がある。進路を考える上で、大学の先にある社会を意識するという意味でも重要なことであろう。

(4) 進学サポート

進学先の選定において、生徒の特性と興味や強みが、進学先の大学（学部）とうまく適合しているかどうか検討する必要がある。社会人になったアスペルガー症候群の青年は、「小さい頃から、自然科学全般に興味があった。大学はその興味の延長線上の学部に入学することができた。大学の学問は狭くて深いという特徴があるが、アスペルガー症候群の特性にはぴったりする。レポートを書くのも苦にならないし、授業や試験も苦にならなかった。自分の関心事と学問が一致し、進んで勉強したいという気持ちが強かった。」と言う。

進学する大学が発達障害に対する支援が行われているかどうかリサーチする必要がある。大学の入試課、学生相談室、障害学生支援室、保健管理センター等の窓口で担当者から情報収集することができる。大学で発達障害学生に対する連携体制が整っていれば、修学（教務）、メンタルヘルス、キャリアについてのどの相談窓口からでも、発達障害専門支援部署につながることができる。

また、受験時の際の配慮事項に関しても、必要ならば各大学の入試課に相談することができる。我々の調査[4]によると、身体障害のある高校生と比較すると、発達障害の中でもASD、ADHDのある高校生の場合は入試を受ける上での問題は比較的少ない。過敏性を持つ発達障害者も少ないことから、入試における配慮は個別に対応する必要があるだろう。平成22年度から大学入試センター試験の特別措置に発達障害の枠が正式に加わった。特別措置の内容は、一般科目の場合、試験時間の延長（1.3倍）、チェック解答、拡大文字問題冊子の配付、別室の設定、1階又はエレベーターが利用可能な試験室で受験・試験室入口までの付添者の同伴、試験場への乗用車での入構、トイレに近い試験室で受験、座席を試験室の出入口に近いところに指定等である。大学では、入試センターが決定した特別措置に準じて大学別の学力検査を実施することになっている。

## 4．おわりに

富山大学が行った調査では、高等学校で発達障害のある生徒を対象として特別支援教育を行っているにも関わらず、そのことを本人や保護者に知らせていないケースがあった[4]。この場合、高等学校から大学に当該生徒の支援について申し送りをすることができず、本人が進学後自ら大学の支援窓口に出向くことも期待できないため、支援が継続されないという現実があった。発達障害生徒

への支援は、本人が自分の特性を知り、対処する方法を知ることである。診断の有無よりも、自分の特性を自分なりに理解することが大切であり、本人と支援者との対話、保護者と支援者との対話が非常に重要なポイントであろう。

**＜参考文献＞**

1）高橋知音（2010）発達障害を「育ち」から見る～大学生～.発達障害の理解と紫煙を考える.臨床心理学増刊第2号，金剛出版，p82-87.
2）斎藤清二、西村優紀美、吉永崇史（2010）発達障害大学生支援への挑戦．金剛出版，p140.
3）西村優紀美（2010）発達障害大学生に対するトータル・コミュニケーション・サポート～新しい社会環境へのスムーズな参入を目指す支援の在り方～．LD＆ADHD 第36号，明治図書.
4）斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史・桶谷文哲・水野薫：高機能発達障害学生が望む高大連携の在り方と大学の受け入れ体制に関する実証的研究，平成22年度文部科学省障害学生受入促進研究委託事業（日本学生支援機構受託事業）―障害のある生徒の進学の促進・支援のための高大連携の在り方に関する調査研究報告書．2011（印刷中）.
5）西村優紀美（2010）発達障害のある大学生の支援を通して大学全体をユニバーサルデザインに．梅永雄二編著，TEACCH プログラムに学ぶ－自閉症の人の社会参加．学研，133-148.